

■ 書 評



精神医学徒然草 —教授室の窓辺から—

武田雅俊 著
新興医学出版社
2015年4月 456頁
本体価格 4,500円+税

本書は、阪大精神医学教室武田雅俊教授の定年退官を記念して、先生ご自身がまとめられたものである。第一章には、武田先生の幼小児期から阪大入学までの生い立ち、大学時代、精神科に入局した経緯、教授就任から退官までの阪大精神科同門会和風会の著作などがまとめられている。武田教授と私は同学年でほぼ同郷で育ったという共通点があり、特に佐賀の神童といわれた武田先生が、ピアノを熱心に練習するために私の故郷久留米に毎週通われていたということで親近感をもって読ませて頂いた。若い先生方の中はご存じない人もいるかもしれないが、私たちの時代は東大紛争を始め学生運動が最も激しい時期であり、先生が東大入学直後の昭和44年は東大の入試が中止になった年である。先生は政治的な動きや争いごとが嫌いな人と日本精神神経学会理事長になられた現在も感じているが、東大入学後、紛争で勉強ができない東大を離れてダートマス大学留学の選択がなされたのもそのようなことに関係していることが読み取れた。ダートマス大学卒業後、東大理系大学院を卒業されるため東大医科研に戻られる1年余り、世界中を放浪のような一人旅をされて、現在の国際人武田雅俊先生が形成されていったことがよく理解できる。その後、先生は阪大医学部に学士入学一期生として入学され、昭和54年に医学部を卒業された。

第二章では、先生の恩師である金子仁郎先生、工藤義雄先生、西村健先生、辻悟先生など阪大精神科の歴史を築かれた先生方について敬愛をもって紹介されている。第三章は、先生が書かれ

たいいくつかの書評をまとめられたものであるが、先生の幅広い研究を網羅する選択がなされている。第四章では、精神医学の研究について書かれた論文が集められている。これも先生の精神医学全体をみた幅広い興味がうかがえ、特に若い先生方には是非読んで頂きたい。

さらに五章は精神医学の論考、第六章ではモーツァルト、ベートーベン、シューマンなどの音楽家などの関連するいわば病跡学的な解釈がなされたエッセイなど、これまでしたためられた論文が集められ、最後の第七章では日本精神神経学会の再建までの先生の歩みがまとめられている。学術総会における教育講演プログラムの導入、さらにシンポジウムを精神誌の特集として論文化すること、PCN誌を学会の英文誌としてIFを有する雑誌にしたこと、精神神経学雑誌百年などの新企画、さらに専門医制度の導入などによって6千名以上の会員が集う総会を企画するなど日本精神神経学会の大変革の時期のかじ取り役を果たされた先生の業績と学会の歴史の一端を理解することができる。精神神経学会が本来の学術団体としての機能を果たせるようになったことに対する武田先生の功績はまことに大きい。

たいへん忙しい先生がこれだけの資料を短期間でよく整理されたと思う。私は現在、先生の後任として精神誌編集長の任をまかされているが、精神誌は精神科関連で最も歴史がある雑誌であり、1万6千人余りの会員が読む最も発行部数が多い雑誌であることから、本書で先生が強調されているように和文誌として、貴重な症例報告や、和文でしか伝えられないような論文を掲載して精神科医が最も関心を示す雑誌に育てていきたいと考えている。

本書の書評を書くこと引き受けたのも学会員の皆さんに本書を読んで頂ければ、武田理事長の人となり理解できると思ったからである。本書は、どこの章から読んでも、読み物としても楽しめるまさに徒然草である。

(中村 純)